

シンガポール華人社会の言語 —英語重視政策で教育を受けた母親達—

高橋美由紀

外国語教育講座 (英語教育専攻)

Language Education and Language Use in the Chinese Singaporean Mothers

Miyuki TAKAHASHI

Department of Foreign Languages (English Education), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. はじめに

シンガポールは、古代から交易で栄え、多くの民族が融合した複合民族国家である。この国の総人口は約435万人であり、民族構成比は、華人系約76.8%, マレー系約13.9%, インド系約7.9%, その他約1.4%である [Census2000: xiv]。国語はマレー語であるが、公用語は、英語、中国語、マレー語、タミル語の四言語となっている。

1965年8月9日、シンガポールはマレーシア連邦から分離独立を余儀なくされた。この時から、シンガポールは、生き残りのために「国民統合」がいつそう緊急な課題となった。そして、国家発展のために経済を重視した政策を展開し、世界、とりわけ英語圏を考慮した経済活動を行ない、各産業界でも同様な活動を重視した。

政府の目的は、国際社会で有利となる英語と、民族語を一言語選択とするといった、英語を優位とするバイリンガル教育を実施し、国民に英語を共通語として定着させ、「国民統合」を図ることであった。

Gopinathan [1976: 76] は、シンガポールにおける英語の必要性について、次の4点に集約されると述べている。

- (1) 英語が国際語であり、科学技術の言語であること
- (2) シンガポールにおける諸記録、行政、司法の連続性を保証できること
- (3) 各種民族が平等な条件で接することのできる中立的言語であり、共通語として適していること
- (4) 外国投資者の用いる言語であること

Gopinathan [1976: 76]

現在、シンガポールでは、英語で教育を受けた人々

の日常言語として、英語が定着している。本論文では、国家の英語重視政策により、英語学校で教育を受けた人々、とりわけ、国民の大多数を占める華人において、児童の母親を対象として、彼女たちが受けた言語教育や言語環境が、現在の彼女達の言語使用に与えている影響について、アンケート調査の結果より考察する。

2. シンガポールの言語教育の変遷

シンガポールでは、現在、英語と民族語のバイリンガル教育を実施している。英語は全ての学校の教育言語であり、また、民族語は、道徳と民族語の教育言語である。

独立当時、シンガポールには英語と民族語別に学校が存在しており、英語学校では第一言語の英語と、第二言語として中国語、マレー語、タミル語のいずれか1つを学習しなければならなかった。他方、各民族語学校では、第一言語の中国語、マレー語、タミル語をそれぞれ履修し、第二言語として英語を履修することが要求された。

バイリンガル教育は、1960年には小学校で必修とされた。そして、同年、全ての学校に小学校卒業試験 (Primary School Leaving Examination (略称 PSLE)) が導入された。そして、1966年には、第一言語に加え、第二言語が PSLE の科目として導入された。これにより、第一言語と第二言語の試験の比重は等しくなった。また、1966年に入学した子ども達から順次、英語学校では「公民 (道徳)」を第二言語で教えた。他方、民族語学校では、算数と理科を英語で教えることになった。

1969年から中等教育課程でも第二言語は必修となり、中学校卒業資格試験の科目にもなった。さらに、同年より、中学校1年生の生徒から卒業段階で学科試験を課すこととなった。マレー語学校、タミル語学校の中学校では、1年次に木工や金属加工などの技術科目が英語で教育され、英語学校の生徒は「公民 civics」

を民族語で教育された。さらに、1970年に、英語学校の小学校3年生が、「歴史」を第二言語で教育された。

1979年までの教育制度は単線型であった。子ども達は、小学校卒業時のPSLEで合格したものだけが中学校に進学する。試験科目は、①第一言語としての英語・中国語・マレー語・タミル語の内1言語、②第二言語としての英語・中国語・マレー語・タミル語の内1言語、③算数、④理科であった。さらに、中学校で4年間の教育を終了したものが卒業試験として、ケンブリッジ大学の地方試験組織とシンガポール教育省によって実施されているGEC“O”レベルを受ける。試験内容は、①必修科目として二言語（英語・中国語・マレー語・タミル語のいずれの言語でも受験できる）、②文学、③数学、④理科が決められており、⑤その他に歴史、化学、生物等の選択科目もある。そして、この試験で優秀な成績を修めた生徒は、ジュニア・カレッジ Junior College に入り2年間の教育を受けるか、又はPre-University プレ・ユニバーシティで3年間の教育を受ける。その後、GCE“A”レベル(Singapore-Cambridge General Certificate of Education Advanced Level Examination)の試験を受けて、その結果によって大学か教員養成学校に進学できる、という制度であった。なお、試験科目は、①小論文、②第一言語、③入学希望学部に必要な選択科目(3及び4科目)であった[名古屋市1996:251]。

バイリンガル教育の占める時間数は年々増加していった。小学校では、バイリンガル教育の割合は、1972年には18.0%、1973年には25.0%、1974年には33.3%、1975年には40.0%であった。1978年12月には、英語を強化するために、民族語学校の中学校で補足的なプログラム(Supplementary English Language Programme)が公表された。そして、1979年には、後期中等教育(高校)に入学するためには、第二言語に合格しなければ入学許可が得られなかった。

1968年に本格化した外資導入政策によって、英語の経済的価値が高まり、英語学校出身者の方が、大学入学、就職、昇進などの点で優遇されるようになると、益々、英語学校を選択する割合が高くなった。民族語学校は毎年入学者が減少し、1981年にタミル語学校、1986年にマレー語学校が消滅した。政府は1984年から残存の非英語学校も段階的に英語を教育言語とするよう通達し、民族語学校の児童の減少を理由に1987年から全小学校を、英語学校とした。そして、1995年に中国語学校の最後の中学生が卒業し、英語を教育言語とする教育体系が完成した。

1977年に政府は教育政策として、①高等教育を英語に統一する、②初等・中等における民族語教育を再建し、アジア的価値体系を教え込む、といった教育・言語問題の改革に乗り出した。

政府は、1979年に新しい教育制度を導入し、小学校

から能力別に言語教育を行った。この教育制度は、(1)能力の無い子ども達がドロップアウトしないように、どのレベルでも少なくとも一つの言語は熟達できるようにしたことと、(2)進学の段階毎に子ども達の成績によって進路修正が可能としたことを特徴としている。そして、小学校3年生の修了時にテスト(Primary 3 Test)を実施し、4年生から、「普通二カ国語コース Normal Bilingual course (4～6年生・70%～80%程度)」、「延長二カ国語コース Extended Bilingual course (4～8年生・10%程度)」、「一カ国語コース Monolingual course (4～8年生・10%程度)の3コースに振り分けるシステムを構築した。

小学校・中学校は言語別の学校が存在していたが、後期中等教育からの教育言語は英語であった。そのため、中国語学校やマレー語学校等、民族語学校出身の生徒は不利となり、英語への切り替えが大きな問題となった。Junior College(高校)では、入学当初は、民族語学校出身者は、英語学校の出身者よりも低いレベルの授業を受け、その後、英語の授業についていける者だけが順次高いレベルへと進んでいった。また、Pre-University(高校)では、第一言語別のカリキュラムが組まれ、英語学校出身者と民族語学校出身者では授業内容が異なっていた。しかし、1980年度から、Junior Collegeで、第二言語は必修となった。そのため、それまで英語の成績だけが重視されていたが、GCE“O”レベルの民族語の成績も引き上げられた。

高等教育では、1980年度からは南洋大学がシンガポール国立大学に吸収合併されたことから、英語のみの教育となった。また、シンガポール国立大学入学 National University of Singapore (NUS) への英語の合格点が引き上げられた。

1991年には、『初等教育改善案』が提案され、1992年からストリーミング・システムとして実施された。これは、3年生で実施していた振り分けテストが、4年生に延期され、5年、6年で言語別ストリームクラス(表1:EM1, EM2, EM3に選別する)を実施することになった。なお、振り分けテストは、英語と民族語の言語能力、算数を評価基準として行われた。

表1: 言語ストリームの特徴

言語ストリーム	対象・内容など
EM1	英語と民族語を第一言語とする。
EM2 EM2(E) EM2 (MT)	英語を第一言語、民族語を第二言語とする。 EM2と英語のリメディアル授業 EM2と民族語のリメディアル授業
EM3	英語を第一言語、民族語を第二言語として会話のみ(リーディング・リスニング・会話)
1993年より ME3	民族語を第一言語、英語を第二言語として会話のみ(リーディング・リスニング・会話)

EM1とEM2の間には明らかに中国語教育の差が認められる。また、英語と中国語のクラスの授業時間数は、能力が高いクラスほど差がなく、能力が低いク

ラスでは第一言語である英語の学習にそのほとんどが充てられている。

EM1, EM2, EM3の違いは、その後の子ども達の進路にかなり影響を及ぼすことが予想される。さらに、このストーリーミング・システムが学校や子ども達の評価に直接繋がるので、保護者や教師は、子ども達の英語と中国語、算数教育には過剰なほど熱を入れる。

ストーリーミング・システムは、EM1の子どもにはエリート意識を助長し、EM3の子どもには劣等感を植え付け、社会全体の価値観がこのストーリーミングで決定されるような錯覚に陥る危険性があった。

3. 言語教育と日常言語—アンケート調査にみられる母親達の使用言語

本調査は、華人社会の日常言語が、母親達の受けてきた言語教育や彼女達の生育歴とどう関わっているのかを知るために実施した。

筆者は、児童の母親達の受けた言語教育と彼女達の家庭内での使用言語の関係について面接調査を行った。具体的には、児童の母親達の日常生活において、会話の相手や場所、場面、目的別に使用される言語について調査した。調査は、シンガポール華人社会に生まれ育った就学前の幼児や小学校に通う児童を持つ母親を対象として行い、350名から有効回答が得られた。

(1) 調査時期と場所

調査時期は、2003年8月から2005年2月まで行った。調査場所は、アンモキオ地区で実施した。筆者は調査を実施した初期の頃には、中国語方言と中国語の通訳者と一緒にアンモキオ内のHDBの団地を一世帯ずつ訪問した。児童の母親で専業主婦に限定して協力を求めたが、昼間の時間帯はパートで仕事をしている人や、日常の雑用、子ども達の保育等で忙しい人が多かった。そこで、面接調査中には子どもの世話を夫に依頼できる時間帯で、家族が団欒を過ごしていると思われる19時から21時頃の時間帯に変更し、調査に応じてくれる対象者を探し求めた。しかし、的確な調査対象者を探し出しても、家庭を訪問して行う調査は、被験者の身元が明確になるため、無記名であっても応じてくれる人ばかりではなかった。そのために、家庭を訪問することを止めて、団地に隣接している、ホッカー・センターやコーヒー・ショップ、雑貨など日常生活用品を売っているショッピング・センター、住民のサービスの場であるコミュニティー・センターや地域の図書館内のカフェテリア、さらに、小学校の正門や幼稚園の玄関等で、児童の母親達に話しかけて調査に協力してもらった。

(2) 被験者の年齢と子どもの年齢と人数

児童の母親達の年齢は、20代から50代までの年齢層

であったが、350名の60%は、1960年代生まれであった。したがって、政府の英語重視政策が実施された後に、英語学校か中国語学校で教育を受けた年齢層が多い。また、子どもの年齢については、小学生がいる母親を対象としたが、第一子が小学生の場合と末っ子が小学生の場合があるため、彼女達の子どもの年齢には、乳児から成人までの幅があった。しかし、子どもの述べ人数695名の64%は、幼・小学生であった。そして、彼女達の子どもの人数は、1人から5人までと幅があったが、2人の子どもの平均的であった。

(3) 学歴

学歴は、中学校卒業程度が153名(43.7%)と一番多かった。次いで、大学教育以上の93名(26.3%)、その次が中等後教育の82名(23.4%)であった。

Census(2000年)によれば、華人女性の大学卒業者は、30～34歳が22,418名、35～39歳が15,629名、40～44歳が9,215名、45～49歳が5,279名である。シンガポールの15歳以上の女性のそれぞれの年代から大学卒業者の割合は、30歳～34歳が、15%(143,461名)、35～39歳が10%(154,427)、40～44歳が6%(151,625)、44～49歳が4%(128,137)である。また、NUS入学者は、1999-2000年では学部が20,617名、1999年9月の大学院入学者が8,712名であった[Ministry of Information and the arts 2000:218]。

したがって、この調査では、学歴の高い被験者が多かった。この理由としては、①被験者の年齢が、1956年生まれから1970年生まれまでが280名で全体の80%を占めていることが挙げられる。シンガポールでは、若い世代ほど学歴が高い傾向がある。さらに、②学歴、学校別の調査に快く応じてくれる被験者は、比較的学歴のある場合が多いと思われる。その意味では、「シンガポール国立大学(NUS)」を卒業した被験者は、即座に大学名を明確に回答してくれた。また、言語学校別では、英語学校出身者が多い。この理由については、シンガポールの言語政策により中国語学校は徐々に減少し、1987年には英語学校に統一されたので、当然、若い世代ほど英語学校で学んだ被験者の方が多いからであると考えられる。

表2: 年齢層(人)

1955 年生 まれ以上	1956 年～ 1960 年生 まれ	1961 年～ 1965 年生 まれ	1966 年～ 1970 年生 まれ	1971 年～ 1975 年生 まれ	1976 年生 まれ以下	合計
23	72	107	101	35	12	350

表3: 子供の年齢(延べ人数)(人)

1984 年生 まれ 以上	1985 ～ 1987 年生 まれ まで	1988 ～ 1991 年生 まれ まで	1992 ～ 1994 年生 まれ まで	1995 ～ 1997 年生 まれ まで	1998 ～ 2000 年生 まれ まで	2001 年生 まれ 以下	合計
44	36	106	144	167	136	62	695

3. 2. 児童の母親達の日常言語

3. 2. 1 相手によって異なる言語使用

児童の母親達の使用言語において、彼女の祖父母、両親やキョウダイと話す時には、母語が他の言語より優先される。すなわち、彼女達が育った家庭では、家族が使用してきた言語環境の影響を強く受けている。そして、キョウダイとの使用言語では、家庭で両親が話す言語だけでなく、彼女達の受けた学校での言語教育も影響を与えている。例えば、キョウダイとの会話では、中国語学校出身者が使用する言語は中国語が、他方、英語学校出身者が使用する言語は英語の比率が最も高い。特に、キョウダイが同じ言語学校で教育を受けた場合では、言語学校の影響は大きい。また、キョウダイが異なった言語学校で教育を受けた場合は、中国語方言を使用することが多い。夫との会話では、学校教育を受けた言語によって使用言語に相違が生じている。

児童の母親達が、彼女の祖父母との会話で使用する言語は、中国語方言が圧倒的に多い。これは、彼女達の祖父母が学校教育を受けている場合が少なく、中国語方言以外に使用できる言語を持たないからである。他方、児童の母親の中には、中国語方言を話すことができない人もいた。その様な場合は、彼女達の両親が、児童の母親と祖父母の通訳をしてコミュニケーションを成立させている。そのため、児童の母親は、祖父母と中国語方言で挨拶程度しか交わさない人もいた。また、祖父母も児童の母親も英語学校で教育を受けている場合、英語を会話に使用していた。なお、児童の母親は1980年生まれであり、祖父母も年齢的に若いと思われる。

英語学校出身の児童の母親達は、彼女達の祖父母や両親との会話でも英語を使用しており、既に彼女の家庭が英語環境であったことが認識できる。さらに、英語は教育によって習得できる言語であり、当時、英語教育が受けられるのはごく限られたレベルの人々であったことから、児童の母親の親世代で英語を話す家庭であれば、彼女達は経済的に恵まれた環境であることが認識できる。

児童の母親が英語で教育を受けた場合に、彼女達の父親との会話で英語を使用する比率は、中学校卒業の場合は6.1%（7名）、後期中等教育を受けた場合は8.3%（6名）、シンガポールの高等教育、すなわち NUS かナンヤン工科大学 Nanyang Technical University (NTU) 出身者は25.0%（13名）であり、児童の母親の学歴が高いと父娘間で英語を使用している。故に、英語学校で教育を受けた高学歴の児童の母親は、英語を操ることができる彼女の父親のお陰で、豊かな生活と、高い学歴を得ることができたと思われる。他方、母親との会話では、どのカテゴリーも、中国語方言を使用する比率は父親との会話で使用するよりも高

い。これは、父親より母親の方が学校教育を受けていない（＝学歴が低い）ことや、母親が家庭内で家事・育児に専念していたためと考察できる。さらに、児童の母親が高学歴である方が、両親との会話では中国語や英語を使用する比率が高いことから、児童の母親の学歴と両親の学歴には、相関関係が生じていることが認識される。

児童の母親達が現在営んでいる家庭で、夫との会話では、学校教育を受けた言語によって使用言語に相違が生じている。そして、高学歴である児童の母親達の方が中国語方言を使用しないことが認識できた。

また、現在では、住宅事情から、「核家族」で居住している家庭が多い。そのため夫婦の会話で使用する言語が、現在営んでいる家庭での言語として、そのまま子ども達の言語教育に反映する。そのため、彼女達は、夫婦間の会話であっても、子ども達を意識して言語を使用しているケースもあった。

夫婦の会話で使用する言語は、彼女と夫が受けた言語教育と中国語方言の異同によって決められる。例えば、中国語方言が同じで、夫婦が英語学校で学んだ場合は、会話では中国語方言と英語を使用するケースが多い。また、夫婦がそれぞれ英語学校と中国語学校で学んだ場合には、中国語方言とそれぞれが話すのが得意な言語（英語か中国語）が混在する。

他方、中国語方言が異なる夫婦の場合には、夫婦が教育を受けた学校、つまり、英語学校出身者は英語、中国語学校出身者は中国語を使用する人が多い。また、夫婦の教育言語が異なっている場合には、夫婦がお互いにコミュニケーションが図れる言語を使用している。さらに、児童の母親が他民族の人と結婚した場合は、夫婦の会話は英語のみであった。

夫や子ども達との会話で使用する言語の要因は、彼女達の生育歴や学校教育言語の要因に加えて、彼女自身の意思で言語を選択しているケースがみられる。すなわち、彼女達の現在の家庭で使用する言語は、子ども達の家庭での言語教育に大きな影響を与えている。そのため、中国語方言で育った彼女達であっても、子ども達に政府が禁止している中国語方言を使用することは殆どない。

子ども達との会話においては、児童の母親が中国語学校で教育を受けている場合は、家庭でも中国語の使用が最も多く、児童の母親が英語で高等教育まで受けている場合は、家庭では英語の使用が最も高い比率を占めている。また、英語学校と中国語学校の、いずれの言語で教育を受けた場合でも、子ども達との家庭での会話では英語と中国語の両言語を併用している場合もある。その傾向が最も強いのは、小・中と中国語学校で教育を受けた後、高等教育を受けた児童の母親であり、家庭内では自らが中国語と英語を同一レベルでを使用することができるため、子ども達に日常生活を通

して自然な形でバイリンガル教育を行っている。また、小・中を英語学校で学び NUS や NTU を卒業した児童の母親の場合は、自らが英語を話す家庭で育っている場合も多い。そのため、児童の母親自身、英語が母語となっているので、学校で学んだ中国語を日常生活で使用する機会は、ほとんどない。しかし、1980年度から、Junior College で、第二言語である民族語が必修となり、1981年より大学入試に中国語が必修となった。言語教育システムが刷新され、学校の成績が良く能力のある生徒は、中等教育で英語と中国語を第一言語レベルの教育を受けた。故に、この制度で英語と中国語を第一言語で教育を受けた (Junior College 卒は18歳、Pre-University 卒は19歳) ことに対して、優越感を持っている児童の母親もいた。

華人の英語家庭の児童の母親達は、中国語を余儀なく学習することになった。そして、英語だけでなく、中国語の成績も良くないと、NUS や NTU へ進学することができなかった。

さらに、1992年5月に政府は、中国語の科目について、「EM1の第一言語としてのレベルを上級中国語 Higher Chinese, EM2の第二言語としてのレベルと中国語 Chinese Language とする」という、新しい中国語の教育と評価について提案し、実施した。その結果、英語家庭の子ども達に対する言語教育として、意識して中国語を使用しているケースもみられた。

児童の母親達は、一般的には、家族以外の人と話す言語については、学校で教育された言語が優先される。しかし、親しい近所の人との会話では、中国語方言を使用して話す場合もある。その場合の会話の相手は、年配の人々であることが多い。児童の母親達は、中国語方言を使用する時は、他の言語(英語や中国語)を使用するより、相手に対して親しみを持つことができると感じている。例えば、同じ中国語方言の人が集まる時には、中国語方言で話す。その方言が理解できない人がいる場合や異なる方言の場合には中国語を話す。さらに、異民族の人が集まる時には英語で話す。また、同じ相手との会話でも、英語と中国語の両方を使用している場合も多く、彼女達は、話の内容や場所によって無意識のうちに英語と中国語を使い分けている。そして、学校時代の友人とは、教育を受けた言語が最もよく使用される。しかし、彼女達が英語学校で教育を受けてきても、中国語も併用して英語と中国語の両方を使用して話す人もいる。

3. 2. 2. 目的によって異なる言語使用

シンガポールの言語政策の経緯からも見られるように、英語、中国語、中国語方言に対して、華人社会では、英語は No. 1、中国語は No. 2、中国語方言は No. 3 というような一元的価値付けがされている。つまり、英語は最も上等な言語で、それは世界的に通用する国

際語、植民地時代に西欧人が使用した高級な言語、高等教育を受けるための言語、エリートが使用できる言語として認識されている。そのため、英語が話せる児童の母親達は、フォーマルな場所では英語を使用する。他方、中国語方言はその対極にある。また、中国語は華人社会の民族語としての役割を担っている。そのため、英語が理解できない人々が、華人の共通語として使用しているが、英語家庭では学校教育の一科目として認識している。

複数の言語が使用できる児童の母親達は、場所によってそれらの言語を使い分けている場合もある。例えば、英語は、政府の機関や郵便局、銀行、病院、子どもの幼稚園や小学校等で使用され、中国語や中国語方言は、ウェット・マーケットやホッカー・センター、近所の HDB の階下のお店で使用されている。

また、美容院等の様に、同種類の店でも場所によって児童の母親達が言語を使い分けている場合もある。例えば、HDB の近くにある美容院では中国語を使用し、オーチャード通りの町の美容院やシティー・ホールにあるショッピングモールの最新のモデルを採択している美容院では英語を話すという人もいる。これは、店舗の場所により美容師の使用する言語が異なっているため、彼女達が、自分の要求を美容師に正確に伝えるためである。また、同じ店舗であっても、美容師の使用する言語に合わせて臨機応変に英語と中国語を使用している人もいる。

衣料品や日常雑貨を購入する時にも、児童の母親達の使用言語は異なっている。居住地の HDB に隣接している店では店主に合わせて中国語や中国語方言を、オーチャード通りの繁華街にある高級品を扱っているデパート等では、彼女達は英語を使用することが多い。これは、デパートには、シンガポール人だけでなく、東南アジア諸国の裕福な人々や西欧諸国の人々等、世界中の人々が来場している。したがって、英語が多民族の共通語、「英語＝国際共通語」としての意識がデパート側に強いことも一要因である。

デパートに勤務している人々は、英語は社員教育でも学ぶ。そして、企業のマニュアルには、接客の時に使用する言語の順序がある。店員は客に最初に英語で話しかける。次に、英語が通じなかった場合には中国語で話しかける。また、中国語方言等しか通じない場合には、客と同じ中国語方言を話すことができる店員と交替して接客する。

スーパー・マーケットでは、新製品のプロモーション等は、英語と中国語の両方で行われている。客は、売り子のデモンストレーションを観ながら、英語か中国語の説明を聞く。筆者が台所用品の包丁を売るためのデモンストレーションを観察していた時には、売り子が英語で話す時には、中国語で話す時よりも若い女性が多く集まっていた。

華人社会では中国語方言や中国語で話す方が、英語で話すよりも親近感を抱くと思っている人も多い。HDBの階下にある店舗やウェット・マーケットでは、中国語を積極的に使用したり、中国語方言を取って使用したりする人もいる。例えば、店主と値段交渉をする時には、店主の話す中国語方言をわざわざ使用している客もいる。この理由は、中国語方言は、他のどんな言語より親しみ感があると認識されているため、店主が客に「常連」という気持ちを持って安くしてくれる場合が多いからである。また、HDBの近くにある中国の漢方薬を売る店舗では、「英語より中国語の方が詳しく薬の説明をしてくれるので、中国語で話した方が安心して買うことができる」と言う人もいる。同様に、HDBの近くの日常雑貨店で商品の説明を受けたり、相談をしたり時も、英語より中国語の方が詳しく聞ける場合もある。

食事をする場所である、西洋レストラン、中華レストラン、ファーストフード店においても、児童の母親達は使用場所によって言語を変えている。中華レストランでは圧倒的に中国語の使用が多い。他方、ファーストフードでは英語の使用が多い。これは、彼女達がメニューにある食べ物の注文をする時に、相手に伝えやすいからである。

宗教で使用する言語では、その宗教によって使用言語が異なっていると思われる。無宗教の人も最近が増えたが、華人社会では約64%の人が道教や仏教等の東洋の宗教であり、ここでは中国語か中国語方言が使用されている。また、キリスト教信者の人は、16.5%であった。教会では英語と中国語のどちらの言語でも礼拝が行える。

劇場や映画は、エンターテインメントの内容によって異なる。また、中国語映画であっても、英語の字幕があるので、英語しか理解できなくても十分に楽しむことはできる。しかし、「中秋の名月 Mid-Autumn festival」等の時に野外劇場で上演されるチャイニーズ・オペラは、中国語だけでなく中国語方言で上演されることもあり、児童の母親達は、彼女らの親世代と一緒に楽しんでいる。

児童の母親達の使用言語において、一般的にリテラシー能力が重視される新聞や雑誌、本、パンフレット等は、彼女達が中学校までに受けた言語教育が影響している。

英語新聞と中国語新聞では同じ内容が掲載されていると言われているが、比較すると英語新聞の方が「情報量が多い」という意見であった。一方、中国語新聞は、小学校の教師が児童の中国語教育のためには新聞が効果的であると勧めるので、英語家庭の家でも、一週間に一度程度購入する。また、児童の母親達も子ども達と一緒に英語と中国語の新聞を読むという意見もあった。

テレビ番組を観るための言語においては、その番組の内容によって、児童の母親が、英語か中国語を選択している。これは、放送される言語により中国語番組には英語の、英語番組には中国語の字幕があるため、言語の問題はない。

児童の母親達は英語より中国語放送を観る方が多い。彼女達に人気のあるドラマを比較してみると、中国語放送では、*Seed of Hope*, *Genius Physician-Ti Ying*, *The Undisclosed* 等、主人公が華人であるものが多い。このような華人の心情がよく理解できる「お茶の間ドラマ」は主婦層には人気が高い。他方、英語放送は、アメリカを舞台にした *Law & Order*, *Boston Legal 2*, *Desperate Housewives 2* 等であり、中国語ドラマの様に身近に感じることはないと言う。また、中国語放送では、バラエティー番組等の娯楽番組も英語放送より充実している。故に、彼女達は中国語放送の方が英語放送より積極的に観ている。さらに、三世代同居等の家庭でも、家族団欒の娯楽としてテレビを観る時は中国語放送が多い。これは、三世代が一緒に見られる番組が多いからである。また、英語放送はニュース等、短い報道番組を中心として観ている人が多い。

3ヶ月毎の視聴率の調査によれば、2004年7月から9月までの Channel 5（英語放送）・Channel i（英語放送）と Channel 8（中国語放送）・Channel U（中国語放送）の「特定の決められた時間にそのチャンネルをつけた視聴者」の比率は、Channel 5 が13.8%・Channel i が3.6%であったのに対し、Channel 8 は43.3%・Channel U は20.3%であった [Media Development Authority 2006]。

これはシンガポール華人の巨視的な言語・文化状況が明らかにされたと考えられる。

彼らにとって、英語は、学校教育の言語であり、知識や情報を得る手段には必要な言語である。一方、相対的に華人社会の日常生活の文化面や華人の精神面では、英語は結びつきが薄いことが明確に現れている。すなわち、英語家庭では、中国語放送を英語の字幕で楽しんでいることから、文化や華人としてのアイデンティティ等、中国と結びついているものをも、彼らは内容を理解するためには英語を使用していることが認識できる。

4. まとめ—母親達が子ども達に与えたい言語教育

現在、シンガポールでは、英語が最も重要な言語であり、その価値を国民全体が認識していることは明確である。

政府の英語重視政策は、華人社会の言語教育に対する意識に影響を与えた。とりわけ、女性の教育に対し、これまで、中国語学校で教育を受けることが「結婚に有利」とされていたが、英語学校の方が「就職・進学に有利」という価値観に徐々に変化していった。

英語学校と中国語学校が存在した時代では、彼女たちは両親の方針で英語か中国語のいずれかの学校で教育を受け、受けた言語によって、英語社会と中国語社会に棲み分けをされ、地域社会では中国語方言により棲み分けがされていた。

しかし、英語学校のみとなってからは、その壁が徐々に取り除かれてきている。また、地域社会でも、教育を受けた人が増加し、英語を話せる人も増加している。他方、これまで家庭内言語として優勢であった中国語方言は、使用者が減少している。これは、中国語方言しか話せなかった年輩者が亡くなったことだけが原因ではなく、交通が発達し容易に移動が可能になったことで、学校や職場での友人達との交流の機会、異なった中国語方言や異なった民族との結婚が増加したこと、さらに、通信やマスメディアの発達等がその要因として挙げられる。

華人社会の母語の認識も変容している。シンガポールに移民してきた人々は、それぞれの出身地の言語、福建語、広東語等、中国語方言を母語とし、家庭内で使用しており、子ども達も中国語方言を母語としていた。しかし、英語重視政策で教育を受けた世代が家庭を持ち、その子ども達が学校教育を受ける現在では、母親達は育った家庭で使用していた言語を親戚や親戚ョウダイの会話では使用しているが、彼女達が現在営んでいる家庭生活において、子ども達との使用言語には中国語方言はたとえ夫婦が理解できたとしても使用しない傾向がある。

英語は彼女達の現在営んでいる家庭に浸透しており、子ども達の母語になっていること、また、彼女達の言語使用の要因が、子ども達の言語教育や言語使用に対する願望と深く関係していることが明確になった。すなわち、英語は母親達の日常言語となり、子ども達の母語となっている。そして、英語学校における中国語は、親世代も子ども世代も「第二言語」としての地位である。

政府の言語教育政策により、1979年に、後期中等教育（高校）に入学するためには、第二言語が必修となり、さらに、1981年に大学入学許可のためには第二言語が必修となった。そのため、高等教育への進学を目指す華人の子ども達は、英語と同様に、中国語も重視して学ぶ必要があった。しかし、英語学校で教育を受けてきた生徒にとって、学校でも日常生活でも使用しない中国語は、試験のためだけの言語である。

現在、子育てをしている英語で教育を受けた母親世代にとって、「中国語は進学のために勉強はしたが苦手であり、日常生活ではあまり使用しない」という人は大勢いる。

英語で教育を受け、英語を使用して仕事をし、家庭でも英語を話して日常生活を送っている彼女達は、中国語、とりわけ、中国語の読み書きができない不便さ

をさほど感じていない。むしろ、中国語に対しては、自らが受験のための中国語で苦労したたことの方がトラウマとなっている。そのため、子ども達には財力がゆるすかぎり、「中国語に対する苦手意識」を持たせたくないという願望がある。

さらに、学校教育では中国語（民族語）と英語のバイリンガル教育が重視されて、小学校からレベル分けがされていることや、家庭では英語環境しかないこと等の理由で、早期から子ども達に中国語の教育をしている母親が多い。

家庭では、子どもと保護者の関係は、父親より母親の方が密接である。とりわけ、母親は保育者として、幼児期から児童期の子ども達の家庭での生活の殆どを共有している。さらに、子どもの教育全般にわたって関心が高く、幼稚園、学校、塾、家庭教師等の選択から、本やテレビ番組に至るまで、子どもの教育の選択の決定権は母親の手に委ねられているといっても過言ではない。

彼女達の子育てにおける教育方針や子どもの教育に対する学校や塾等の選択について、語学教育にかける情熱は高く、とりわけ中国語教育に対して必死になっている。

この理由としては、（１）児童の母親自身の中国語に対するコンプレックス、（２）中国語ができることが現在のシンガポールのステイタスとなっている、（３）英語環境の家庭であるため、児童が中国語を使用する機会が極端に少ない、（４）中国人としてのアイデンティティは失って欲しくないため、中国人の言語・文化を理解して受け入れて欲しい、という点が挙げられる。

さらに、彼女達の学歴や居住形態は、金銭的な価値観や、日常生活の言語環境、子どもの教育にも影響を与えている。自分は儉約してでも、子どもの教育にお金をつぎ込む姿は、一昔前の日本で、「教育ママ」と風刺された児童の母親の姿と同じであり、表面的には国家の言語政策の共鳴板となっている。

参考文献

- Department of Statistics Singapore 2001. *Singapore Census of Population 2000*. Singapore: Department of Statistics Singapore.
- Gopinathan, S. 1976. "Towards a National Educational System", in R. Hassan (ed.). *Singapore: Society in Transition*. pp. 67-83. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Gopinathan, S., A. Pakir, H. W. Kam and V. Saravanan (eds.). 1998. *Language, Society and Education in Singapore: Issues and Trends*. 2nd edition. Singapore: Times Academic Press.
- Ministry of Information and the Art 2000. *Singapore 2000*. Singapore: Ministry of Information and the Art.
- 名古屋市長務局企画部企画課1996. 『国際比較による大都市問題調査研究報告書 XV』国土庁大都市圏整備局。
- 高橋美由紀2007. 「シンガポールの言語政策の変遷－英語重視

政策と中国語」『兵庫教育大学研究紀要第30巻』兵庫教育大学。

(2008年9月17日受理)

表4：児童の母親達の学歴と話す相手別の使用言語 <祖父母>										
	言語別 合計人数	無学 歴	英語 Sec	英語中 等後	英語 NUS/ NTU	英語海外 大学	中=P・英 =Sec.	中=P・英= Sec 以上	中国語 Sec	中国語 Sec 以上
NA	174	1	58	34	21	11	5	1	36	7
CD	152	0	49	33	29	15	1	6	13	6
E	6	0	3	0	1	2	0	0	0	0
M	15	0	3	5	1	1	0	0	4	1
M&CD	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0
E&Ma	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
Total	350	1	115	73	52	29	6	7	53	14

NA=いない・話さない CD=中国語方言 E=英語 M=中国語 Ma=マレー語

表5：児童の母親達の学歴と話す相手別の使用言語 <父親>										
	言語別 合計人数	無学 歴	英語 Sec	英語中 等後	英語 NUS/ NTU	英語海外 大学	中=P・英 =Sec.	中=P・英= Sec 以上	中国語 Sec	中国語 Sec 以上
NA	99	1	41	19	5	6	1	0	20	6
CD	151	0	51	35	22	7	3	3	25	5
E	34	0	7	6	13	8	0	0	0	0
M	52	0	11	8	8	8	2	4	8	3
M&CD	5	0	3	1	1	0	0	0	0	0
E&M	3	0	1	1	1	0	0	0	0	0
E&CD	4	0	1	2	1	0	0	0	0	0
E&M&CD	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0
Total	350	1	115	73	52	29	6	7	53	14

表6：児童の母親達の学歴と話す相手別の使用言語 <母親>										
	言語別 合計人数	無学 歴	英語 Sec	英語中 等後	英語 NUS/ NTU	英語海外 大学	中=P・英 =Sec.	中=P・英= Sec 以上	中国語 Sec	中国語 Sec 以上
NA	32	0	12	3	4	1	0	0	9	3
CD	222	1	76	51	28	14	6	4	34	8
E	20	0	6	1	8	5	0	0	0	0
M	57	0	12	13	9	9	0	3	8	3
M&CD	12	0	7	2	1	0	0	0	2	0
E&M	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0
E&CD	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0
E&M&CD	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0
E&Ma	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
Total	350	1	115	73	52	29	6	7	53	14

表7：児童の母親達の学歴と話す相手別の使用言語 <兄弟姉妹>										
	言語別 合計人数	無学 歴	英語 Sec	英語中 等後	英語 NUS/ NTU	英語海外 大学	中=P・英 =Sec.	中=P・英= Sec 以上	中国語 Sec	中国語 Sec 以上
NA	12	0	5	2	0	1	1	0	2	1
CD	74	1	28	13	7	5	3	2	15	0
E	106	0	36	26	26	12	0	1	2	3
M	69	0	13	15	3	5	2	3	22	6
M&CD	23	0	6	3	0	2	0	1	10	1
E&M	33	0	12	8	8	1	0	0	1	3
E&CD	15	0	9	1	3	2	0	0	0	0
E&M&CD	18	0	6	5	5	1	0	0	1	0
Total	350	1	115	73	52	29	6	7	53	14

表8：児童の母親達の学歴と話す相手別の使用言語 <夫>										
	言語別 合計人数	無学 歴	英語 Sec	英語中 等後	英語 NUS/ NTU	英語海外 大学	中=P・英 =Sec.	中=P・英= Sec 以上	中国語 Sec	中国語 Sec 以上
NA	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0
CD	28	1	17	2	1	1	0	0	6	0
E	143	0	47	34	34	18	0	4	2	4
M	91	0	17	16	8	3	2	2	36	7
M&CD	5	0	1	0	0	0	1	0	2	1
E&M	46	0	13	12	7	6	2	1	3	2
E&CD	14	0	6	7	1	0	0	0	0	0
E&M&CD	19	0	11	2	1	1	0	0	4	0
E&J	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
Total	350	1	115	73	52	29	6	7	53	14

表 9：児童の母親達の学歴と話す相手別の使用言語 <子ども達>										
	言語別 合計人数	無学 歴	英語 Sec	英語中 等後	英語 NUS/ NTU	英語海 外大学	中=P・英 =Sec.	中=P・英= Sec 以上	中国語 Sec	中国語 Sec 以上
CD	2	0	0	0	0	1	0	0	1	0
E	166	0	54	43	38	18	1	3	6	3
M	77	1	19	8	3	2	2	2	36	4
M&CD	4	0	3	0	0	0	0	0	1	0
E&M	92	0	35	21	9	8	2	2	8	7
E&CD	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0
E&M&CD	6	0	3	0	2	0	0	0	1	0
E&J	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0
Total	350	1	115	73	52	29	6	7	53	14

表 10：児童の母親達の頻繁に使用する言語（場所）							
	子供の学校	Government	Theater	Movie	Amusement	Religion	
Na	1	4	14	17	34	45	
CD	0	0	0	0	0	8	
English	264	282	232	214	199	135	
Mandarin	36	28	50	58	63	118	
M&CD	2	1	1	1	1	13	
E&M	46	34	53	60	52	29	
E&CD	0	0	0	0	1	0	
E&M&CD	1	1	0	0	0	1	
E&M&Ma	0	0	0	0	0	1	
Total	350	350	350	350	350	350	

NA=いない・話さない CD=中国語方言 E=英語 M=中国語 Ma=マレー語

表 11：児童の母親達の頻繁に使用する言語（場所）							
	中国 Restaurant	西洋 Restaurant	Fast food	Post office	Bank	Hospital	
Na	2	7	3	2	1	1	
CD	1	0	0	0	0	0	
English	35	293	282	282	283	275	
Mandarin	257	23	26	29	31	31	
M&CD	10	1	1	1	2	1	
E&M	41	24	37	30	31	39	
E&CD	0	0	0	0	0	1	
E&Ma	0	0	0	3	0	0	
E&M&CD	4	2	1	1	1	1	
E&M&Ma	0	0	0	2	1	1	
Total	350	350	350	350	350	350	

表 12：児童の母親達の頻繁に使用する言語（場所）							
	ウェット・マ ーケット	ショッピング ・センタ ー	ホッカー・ センター	デパート	美容院	衣料品店	HDB 階下 や近所の 店
0	19	0	0	2	5	6	9
CD	59	0	32	1	2	1	12
English	7	168	9	184	103	152	59
Mandarin	198	95	241	80	176	120	187
M&CD	53	5	37	8	5	6	24
E&M	5	77	20	71	54	61	51
E&CD	2	0	4	0	1	0	0
E&M&CD	6	5	7	4	4	4	8
Malay	1	0	0	0	0	0	0
Total	350	350	350	350	350	350	350

表 13：児童の母親達の頻繁に使用する言語（目的別）							
	Newspapers	Magazines	Comics	Storybooks	Television	Websites	Brochures
0	1	10	94	22	3	52	24
CD	0	0	1	0	0	0	0
English	216	218	168	214	71	271	247
Mandarin	76	68	60	60	99	10	34
E&M	57	52	26	54	172	16	44
E&M&CD	0	1	0	0	3	0	0
E&M&Ma	0	0	0	0	1	0	0
E&M&J	0	1	1	0	1	0	1
E&J	0	0	0	0	0	1	0
Total	350	350	350	350	350	350	350